

## 研究ノート

---

# 戦後米国の沖縄占領下における女性たちの移動に関する研究 —「戦争花嫁」と「逆戦争花嫁」をとりまく条件と 法整備と川平ワンダリーの事例—

山下 靖子

はじめに

1. 戦後沖縄における「戦争花嫁」
  - 1.1 戦後沖縄と女性
  - 1.2 女性たちにとっての「戦争花嫁」という選択～イメージと現実
  - 1.3 「戦争花嫁」を取り巻く法規制
2. 「逆戦争花嫁」アメリカから沖縄に渡ってきた川平ワンダリー
  - 2.1 戦後初の「逆戦争花嫁」の「沖縄人」夫、川平朝清
  - 2.2 「逆戦争花嫁」川平ワンダリー、沖縄での生活のはじまり

おわりに

注

参考文献

---

はじめに

沖縄戦が始まると、米は沖縄を占領下に置き、戦後も続いた。米軍による統治は1972年5月15日沖縄返還までの27年間続いた。その間沖縄の人々は米軍基地と隣り合わせの生活を強いられた。占領者と被占領者が日常に密接に接する中、米兵と被占領者である沖縄の女性が結婚するケースも少なくなく、彼女たちはしばしば「戦争花嫁」<sup>1</sup>と呼ばれた。

筆者は近年、第二次世界大戦後の米国の沖縄占領下で米軍兵と結婚した沖縄の「女性」、戦争花嫁と呼ばれる女性たちに注目し研究をおこなっている<sup>2</sup>。日系移民研究が盛んにおこなわれるなか、戦争花嫁として日本を離れ「移民」した女性たちにかかる研究等はほとんどなされていなかったといえる。1990年代終わりから2000年に入って、戦争花嫁に関する研究では安良や島田らの研究をはじめとする研究が注目される<sup>3</sup>。2018年6月にはロサンゼルス全米日系人博物館にて「戦後の遺産 日本の戦争花嫁」と題するシンポジウムが開催され注目を集めた。同シンポジウムの提起人フレドリック・カキナミ・クロイド氏が「戦争花嫁に関する本や映画はいくらか存在するものの、これらの歴史や遺産に踏み入って取り組む活動がほとんどなかった」<sup>4</sup>と述べるように、戦争花嫁

に関する研究は、日系人研究が1960年代から注目を集めていったのとは対照的に、行われてこなかった。

沖縄の戦争花嫁についても同様のことがいえる。沖縄における移民に関する調査は、各市町村レベルでも盛んで、その成果は次々と各市町村史の移民史としてまとめられている。沖縄系移民研究は1980年以降、様々なレベルで盛んに行われている<sup>5</sup>。1990年からは海外移民と一堂に会する、世界ウチナンチュ大会というイベントも行われ、その後5年おきに開催され「沖縄最大級イベント」として定着し、海外移民への関心の高さを表す。しかしながら、米兵士と沖縄の女性の結婚については実態調査どころか、その数さえ把握されていない<sup>6</sup>。1972年の沖縄返還前までの婚姻件数は、年間400組といわれていたが、その根拠も明らかでない<sup>6</sup>。沖縄系移民研究でも「戦争花嫁」に関するものはほとんどみられない。こうした状況は、そもそも戦争花嫁に対する関心がないからなのか、あるいは、人々が触れたくない戦後史だからなのだろうか。

管見の限りでは、沖縄の戦争花嫁に注目し、聞き取りを行ったのが比屋根美代子である。比屋根は、1989年より2年間かけてシカゴ在住の戦争花嫁にインタビュー調査を行った。戦前の沖縄から満州へ渡った国策としての「大陸花嫁」を研究している比屋根は、女性の結婚は時代を象徴する固有名詞を生み出すという<sup>7</sup>。比屋根は、「大陸花嫁」と戦後の「戦争花嫁」を比較し、単一民族を掲げる日本は、「国策」によって「大陸の花嫁」を送出し、他方、戦後は女性たちが自ら「戦争花嫁」を選択した、と両者の違いを指摘している。前者は国家が介在した花嫁であり、後者が個人が主体的に決意した戦後民主主義の花嫁が戦後の「戦争花嫁」というわけである。比屋根の調査結果は、まだ公表されておらず、公表が待ち遠しい。その後1994年から米本土在住の戦争花嫁を対象としアンケート調査およびインタビューをおこなった沢舩悦子の研究成果が、2000年に『オキナワ海を渡った米兵花嫁たち』としてまとめられた。戦争花嫁の実態を知るうえで数少ない研究といえよう。

筆者は、前述した比屋根との対話を通し、戦後戦争花嫁のなかに、沖縄人男性と結婚し、米占領下の沖縄にやってきた「逆戦争花嫁」の女性がいることを知った。第一号が川平ワンダリーさん、旧姓ワンダリー ウィーバー Wanderlee Weaver さんである<sup>8</sup>。「逆戦争花嫁」にかかる資料は皆無である。ワンダリーさんの存在は、沖縄戦後史、移民研究のみならずアメリカの占領期沖縄の女性の移動という視点からも極めて重要である。夫である川平朝清氏とのインタビュー調査が可能となり、2019年より調査を重ねている。本研究ノートでは、ワンダリーさんが川平氏と出会い、沖縄にやってくるまでを言及する。占領者と被占領者の両方の立場から戦後沖縄を生き延びたワンダリーさんを、戦後沖縄史に、そして女性の移動にかかる研究に位置付けたい。

第1章では、戦後の米占領下の沖縄において占領者と被占領者の結婚がどのような状況におかれてきたのか、概要をまとめている。具体的には、戦後沖縄の状況、付与された戦争花嫁のイメー

ジ、占領者と被占領者の結婚にかかる法規制についてまとめる。第2章では、夫である川平朝清氏について、また、ワンダリーさんが沖縄にやってきて結婚するまでについてまとめている。まだ資料収集もインタビューも中途であるなかでの報告となることに、ご容赦いただければ幸いである。

## 1. 戦後沖縄における「戦争花嫁」

### 1.1 戦後沖縄と女性

日本の真珠湾攻撃をきっかけとし開始された日米大戦は、二国にとどまらず多くの太平洋地域を巻き込みながら展開された。幾度も敗戦の機を逸し、日本における唯一の地上戦、最後の激戦地となった沖縄に米軍が上陸したのが、1945年3月26日に慶良間列島、4月1日に沖縄本島であった。沖縄戦がどれだけ悲惨と酷さを極めたものであったかは、すでに多くの調査、研究、証言等からも明らかである。敵軍による攻撃による死だけではなく、集団自決、友軍と呼んだ日本軍による住民殺害、飢えやマラリアは非戦闘員である老若男女の住民をすべて巻き込んだ。集団的戦闘は6月23日まで、実際には人々の戦後は、アメリカ軍によって収容所に入れられた日からであるといわれる。

米軍は沖縄上陸とともに、沖縄に軍政府を設置し、米海軍軍政府布告第一号（ニミッツ布告）を交付した。その後、沖縄を統治するための法規として交付された、布令、布告、指令は、沖縄返還までに1400件にのぼるといふ。占領下の南西諸島及びその近海の住民に対する日本国政府の権限の停止と、米軍の占領統治と軍政府の樹立に必要な事項を布告した。戦争と同時に進行に米軍による沖縄の占領は始まっていた。

女性たちにとって沖縄の戦後はどの様に始まり、どのようなものだったか。戦後沖縄の婦人会の中心的人物の一人であり、「沖縄婦人運動史研究会」代表の宮里悦は沖縄戦終戦直後について次のように述べている、

「戦う相手がなくなると、精力をもてあました米兵たちは、女と見れば、山やきび畑に連れ込み辱めるのである。時には、住民居住地に忍び込み、人妻だろが娘だろが空屋敷に連れこみ、何人かで代わる代わる輪姦を果す（略）強姦、輪姦、勝者の気まま勝手な振る舞い、女にとってその恨みつらみは筆舌に尽くせない。全く狂気の渦巻く中に女達はあったのである」<sup>9</sup>。

外間は当時の様子を、「老若男女問わず、妊婦であろうと、食料や燃料の薪を探しにいった山野で、農作業の最中に、集団の中から拉致したり、家の中に押し入って家族の目前で暴行を加える者もいた、米兵の中には公然と、あるいはピストルをつきつけて女性を要求するのもいた」と記録している<sup>10</sup>。宮里は、女性にとっての戦後は、米兵による婦女暴行事件という屈辱と恐怖から始まったと

いう。

こうした米軍による婦女暴行事件が横行していた一方、沖縄では米の対日政策に基づき、日本本土に先駆け女性への参政権が行使された。最初の行使は、1945年9月に行われた市議会議員選挙であった。婦人に選挙権が与えられたことは、「世の中が変わるらしい」という気持ちの人々に抱かせたという。三代目沖縄婦人連合会会長の中村信は収容所で参政権を手に入れたことに「戦場も地獄だったが、ここ（収容所）も地獄だった、（参政権の付与は）生まれてはじめてである、敗戦のおかげで女も一人前の人間に扱われた、（略）私は希望がわく思いがした」<sup>11</sup>と述べている。

また、米軍基地に農地等奪われ、生産手段を失った女性、戦争で働き手を失った、あるいは戦傷者を抱えて、生きるため、家族を養うため、あるいは米兵からの暴行から行き先を失った女性たちが、ハーニー（米兵の恋人・オンリー）あるいは、パンパン（売春婦）になった女性たちも増えていった<sup>12</sup>。彼女たちの数が増えるのと比例して、強盗、殺人、傷害といった米兵の犯罪も増加していった。

女性にとっての沖縄の戦後の始まりは、米軍による婦女暴行、性を生きる糧とする女性たちの増加という「屈辱」と、本本土より先駆けて選挙権が与えられたという「栄光」を併せ持っていた。参政権が付与され、焼土のなかから立ち上がった女性が「婦人が立ちあがってこそ沖縄の復興も成就する」と声を上げ、「婦人の地位向上を求めて」切磋琢磨しているなか、婦女暴行のまさに張本人の米軍人と結婚を決意する女性たちが、ネガティブなイメージでとらえられたのも無理はないだろう。

こうした沖縄戦後初期の社会のなかで、占領者と被占領者の結婚は、両者からとも祝福されるものとして迎えられなかった。

## 1.2 女性たちにとっての「戦争花嫁」という選択～イメージと現実

「戦争花嫁」がネガティブイメージを付与されてきたことは、多くの研究で検証されてきた<sup>13</sup>。沖縄における戦争花嫁も同様であった。比屋根美代子は、戦争花嫁の出会いと、それまでの自身のイメージについて次のように記している<sup>14</sup>。

「1989年秋、私たち親子はシカゴ郊外の公園で開催されたピクニックに集う和やかなファミリーたちに会った。中央にはアメリカらしいバーベキューの食材や鉄板などが用意されていて、体格のよいアメリカ人男性たちがお肉や野菜を焼き始めている。その周りで、昔懐かしいような一訛りで興じる『戦争花嫁』たちがいた。この日、かつては蔑まれた戦争花嫁たちのたくましく生きる姿がまぶしく、目をみはった。」

比屋根は、沖縄でかつて「蔑まれた」戦争花嫁が、「サーターアンダギーなどの沖縄料理を持ち寄っ

て、にぎやかな戦争花嫁と、連れ合い、および子供たちの姿は輝かしく、「目をみはった」という。それから「消え入りたいほどの衝撃を受けた」。当時10代であった比屋根にとって、「アメリカ兵と結婚しなければならない女性」は「可哀そうなお姉さん」であったからである。

比屋根は、戦争花嫁を「かわいそうなお姉さん」と結びつけていた自分に対し、強烈な自己嫌悪に苛まれた。「かわいそうなお姉さん」とは、近所の美しいお姉さんで、「アメリカと一緒に暮らし」かった。比屋根自身「あのころの首里で、まだ中学生であったとはいえ、私は同じ女性として批判的な大多数の大人の側にいた」と振り返る。それから長年の時間を経て、1989年に「アメリカと結婚した女性たち」に再び出会い、「実に見事にうちなー女性の魂を堅持し」、たくましく生きている姿をみたとき、比屋根は、彼女たちの経験、記憶を記録することを決めた。そうすることが「戦争花嫁」に対する贖罪の責務だと感じ、その後2年をかけ、比屋根は戦争花嫁たちにインタビューを行い記録した。

比屋根が抱いていた「可哀そうなお姉さん」のイメージこそ、1950年代の戦争花嫁に対するイメージであり、その後何十年も付与され続けてきたイメージであった。戦後の沖縄における基地拡大ともない、基地の外では地元の女性が米兵にサービスを提供する店が増えた。米兵たちにサービスを提供するのは女性たちで、彼女たちは社会から冷たい目でみられた。そうした女性たちは「ハーニー」、「パンパン」、「オンリー」といった蔑称で呼ばれていたという。米兵と連れ立って歩く女性はみな同一視され、米兵との恋愛は、すべて不純なものとみられたと沢舩は指摘する<sup>15</sup>。米兵と結婚する女性は水商売の女性、といったステレオタイプが戦争花嫁に付与されていたのである。しかし、実際には沢舩の調査結果によると、基地内のPX (post exchange 基地内の売店)、洋裁店や美容室、レストランで働いていた女性が多い。筆者がハワイで出会った戦争花嫁も基地内で米兵の秘書であった、あるいはタイピングなど基地内で働いている女性や、基地そばに洋裁店を持っていたという女性であった。こうしたステレオタイプは家族が結婚を反対する大きな理由となった。「米兵と結婚するのはバーのホステスくらいなものだ」、「うちの一家からアメリカ（沖縄の方言でアメリカ人の意味）と結婚するような女は一人もいない、我が家の恥だ!」といったことばが投げ枯れられたという<sup>16</sup>。黒人米兵との結婚は、人種への偏見も絡み、さらに大変なものであったようである。

戦後の沖縄社会における女性に対する米兵による性犯罪、基地の外の繁華街での米兵を相手にしたバーや、あるいは性を提供する職業につきまとうイメージは、戦争花嫁に対し、ステレオタイプ化されたイメージをつくりあげていったのである。比屋根が「消え入りたいほどの衝撃を受けた」という戦争花嫁のイメージと現実の乖離は、比屋根や沢舩の調査、あるいは前述したシンポジウムでの当事者たちから発信により少しずつ変わってきているが、まだ十分とはいえないだろう。

### 1.3 「戦争花嫁」を取り巻く法規制

戦後直後、沖縄では（日本本土含め）占領者であるアメリカ人との結婚は認められていなかった。なぜなら、アジア人をアメリカへの入国や市民権取得を禁止した、排日移民法と呼ばれる1924年の移民法が適用された。そこではアメリカ市民とアジア人の結婚も禁じられていた。

戦後、「戦争花嫁」を取り巻く法規制はどのように整備されていったのだろうか。アメリカにおけるアジア人に対する人種差別的な移民法は、1882年の中国人排斥法に始まる。日本人移民を敵対する動きも高まり、1908年の「紳士協定」で、日本人移民の入国は制限された。

そのころすでに、白人と「白人が異人種とラベリングする人種」との婚姻を認めないという異人種間子人禁止法が多くの州で制定されていた<sup>17</sup>。妻の米への入国は紳士協定後も認められていたため、アメリカへ移民した日本人男性にとっては「写真花嫁」が結婚へのほぼ唯一の手段であった。しかし、写真花嫁の渡米も1920年の淑女協約により、ビザの発給は停止となった。続いて1924年移民法により、日本からの移民そのものが禁止された。その後1941年の真珠湾攻撃による日米開戦は、米国にいる日本人移民、アメリカ国籍である日系二世たちをも敵性国民と位置付けた。アメリカ人と日本人との結婚が合法化され、米国への入国が再び認められることになったのは戦後、米による日本占領下においてであった。

1945年12月28日に「戦争花嫁法」（公法271号）が制定され、第二次世界大戦に従事した米国兵士および軍属の配偶者及びその子供は、アメリカへの入国が認められるようになった。しかし、帰化不能外国人であった日本人花嫁はその適用外であった。1946年6月29日にはG・Iフィアンセ法（公法471号）で、人種による入国差別は法的には改正された<sup>18</sup>。けれども、同法においても排日移民法の適用により日本人花嫁はアメリカへの入国が認められなかった。この事態の打開に向け、日系アメリカ人市民連盟（JAACL）の反差別委員会は連邦政府に働きかけ、1947年7月22日には公法213として、改正戦争花嫁法が制定された。同改正法により、米兵士及軍属の日本人妻のアメリカ入国が認められたため、公法213は「日本人花嫁法」とも呼ばれる<sup>19</sup>。ただし、同改正法の有効期間は、1947年7月22日から8月21日の30日間に結婚の申請が行われたケースに限られた。同法はその後一か月では短すぎるとの理由で延長された。

同法の制定により、沖縄では初の戦争花嫁が誕生した。当時の沖縄で発行されていた『うるま新報』では、1947年8月1日付で「沖縄女性と米兵との結婚第一号」を取り上げられた。同年8月15日の『うるま新報』では、「新しい世界に向かってよく進み愛に国境なく羅針盤を越えてたくましく発展し異国の人への縁結びは近頃各地で話題となっているが、国際娘よ喜べ」と改訂戦争花嫁法の制定を報じた。軍政府は、沖縄に居る米国市民の結婚について、毎月数日間、横浜から米国総領事が沖縄に滞在し、米軍政府司法部内で結婚の事務手続きをとることになった。日本本土と比べ沖縄での婚姻は極めて高かったという<sup>20</sup>。

他方で、米兵と沖縄の女性との結婚は、米軍側では、好ましいものとして受け止められていなかった。1948年4月1日「米国軍政府特別布告第28号」で「琉球住民と占領軍軍人との結婚」が禁止された<sup>21</sup>。その理由として「琉球住民と占領軍軍人との結婚を禁止することは本司令下の軍隊及び軍属の活発なる行動のため必要と考える」としている。対象となる琉球住民とは「原住民で琉球諸島の何処かに合法的に住んでいる者又は永住の意図で同諸島内に住居を持っている者」であり、男女について問うていない。また「占領軍軍人」とは全米国軍軍人同軍属その家族及び連合国軍人及び同軍属その家族」とし、やはり男女については問うていなく、性別かかわらずに該当するということである。「結婚」についても、正式に披露し登記する結婚だけでなく、内縁結婚の形も禁止した。琉球住民と占領軍軍人との結婚は「不法」と定められ、こうした結婚を認めた者たちの行為も不法行為として定義された。さらに、琉球住民に対しては高額な罰則が明記されているも、相手である米軍人への罰則は除外となっている。米軍がこのような結婚禁止令を出した背景には、米占領軍はそもそも被占領地で被占領地住民と親しくなることを禁じる「ノンフラタニゼーション政策 non-fraternization policy」(非宥和政策)をとっていたことがある<sup>22</sup>。アジア人に対する差別意識もあったのだろう。

わずか4か月あまりで琉球人と米国軍人との婚姻の禁止を定めた米国軍政府特別布告第28号は、同布告第31号によって取り消されることになった。しかしながら、軍政当局は、米軍人と沖縄の女性との結婚には否定的で、兵士に対しては現地の女性と親しくならないように圧力をかけていたという。「現地女性と遊びたければ遊んでもいいが、深入りすうな、本気になるな、といったことが新兵のオリエンテーションでだけでなく、パンフレットで配布されていた」という<sup>23</sup>。

ただし、法的には1952年移民帰化法(マッカーラン=ウォルター法)により日本からの移民が認められるようになり、帰化も可能となった。けれども現実には、周囲の反対は大きかった。また戦争花嫁が蔑まれた一方で、こうした国際結婚が「米琉親善」とし利用された側面もあったことを述べておく。

## 2. 「逆戦争花嫁」アメリカから沖縄に渡ってきた川平ワンダリー

### 2.1 戦後初の「逆戦争花嫁」の「沖縄人」夫、川平朝清

2章では、戦後の戦争花嫁をとりまく戦後沖縄社会と法整備を念頭におきつつ、関心を「占領下沖縄における女性の移動」にまで広げ、「逆戦争花嫁」第1号、ワンダリー ウィーバーさんの事例をとりあげる。ここでいう「逆戦争花嫁」とは暫定的に、「沖縄の男性と結婚し、沖縄にやってきたアメリカ人花嫁」と定義する。取り上げる理由として、第一に、対象時期の女性の移動の多様な形態を知る、第二に、アメリカ人女性の対象時期の沖縄への移動は極めて珍しい。どれほど珍しいかということ、戦後1957年にワンダリーさんがアメリカから沖縄に、川平朝清氏と結婚するために

やって来てから、その後10年あまり、続く女性がいなかった。ワンダリーさんは「特例」であった。ワンダリーさんは占領側のアメリカの女性であり、川平氏は被占領側の男性である。当時、沖縄の戦争花嫁が、アメリカ人米兵と結婚した理由に経済的豊かさは大きな決定要因であったことを考えると、ワンダリーさんからすれば、それまでのアメリカの生活水準を格段下回る生活を余儀なくされる条件での移動であった。しかし、ワンダリーさんの存在は、「安里にある栄町市場、那覇の公設市場に現れるワンダリーさんは人気者だった」「マチグワァーのおばさんたちを魅了していた」<sup>24</sup>という。ワンダリーさんとはどのような人物だったのか。

まず、沖縄の夫、川平朝清氏とはどのような人物であったのかみていく。「川平朝清」といえば、戦後初の沖縄でのラジオ放送 AKAR「琉球の声」の最初のアナウンサーとなり、「川平清」、「キヨシ」として沖縄の人たちに親しまれた<sup>25</sup>。川平氏は1927年家族で移住していた台湾で生まれた。7人姉兄の末っ子で、台湾生まれは川平氏だけであった。台湾での小学校時代（旭小学校—現東門国民学校）に、長兄が台北放送局に関係していたことから、子供の文化サークル活動から始まり、次兄、三兄で「鈴の光子倶楽園」を主宰し<sup>26</sup>、川平氏も児童劇や放送に数少ない男子として参加し、この台湾での経験が、医者を目指していた川平氏が放送の道へと進んでいく原点となった<sup>27</sup>。当時と次兄のすすめもあり、「帝国大学に入ったも同然」であるほど優秀といわれた台北高校尋常科を受験し、志願者458名の中から合格者40人の一人となった。ここでの英語の習得は、また川平氏の人生に大きく影響を与えることになった。のちに『裏切られた台湾』<sup>28</sup>で知られるジョージ・カーと英語の教師として出会い、生涯を通し彼からの影響は大きかった<sup>29</sup>。

日米開戦を、川平氏は「大本営陸海軍は今8日未明、西太平洋において、米英軍と戦闘状態に入れり」とラジオニュースから知った<sup>30</sup>。戦争の最中ではあるが1944年に川平氏は、ほとんどが医学を目指したという（川平氏も含み）高等科理科乙類進学した。この時期、戦況は日本に悪く、台湾人の徴兵制も敷かれるなか、1945年3月、川平氏17歳で学徒動員となった。その時の様子について、「もはや正式な軍服は与えられず、襦袢と袴下と称される下着が制服とされた、みすぼらしい二等兵だった」と述べている<sup>31</sup>。戦後、台北高校に復学し、卒業証書を得ることになるが、台北高校で得た単位がその後の川平氏の米留学にまで影響を及ぼすとは思ってもよらなかったろう。

1946年12月に川平氏は家族とともに沖縄に「引揚げる」が<sup>32</sup>、初めてみた沖縄は聞いて育った沖縄とは似ても似つかぬ姿であった。一緒に引揚げた母が変わり果てた沖縄をみて、「国破れて山河も残らなかつたわね」という言葉は、川平氏に衝撃を与え、その後、筆者が川平氏と話すなかで何度も聞くことになった。

1950年に兄朝申氏の誘いで AKAR「琉球の声」のアナウンサーとなった。1953年、ガリオア留学生として留学した先はミシガン州立大学で、学内に放送局があったという。そのうえ教育テレビジョンの実験局まで開設され、「学習意欲は増すばかりであった」。川平氏は、留学の目的に、沖



繩にテレビを導入させたいという思いがあった。しかし、そのことを知った米民政府の民間情報部は、留学先宛に「沖縄ではラジオ放送がその諸についたばかりであるから、本留学生在がテレビジョンについて学習する必要は全く認められないと思考する」<sup>33</sup>と申し送りがなされていたそうである。このように当時の沖縄にテレビを導入するといったアイデア自体とんでもない話であるなかの、川平氏の野望であった。

戦後の米留学組であり金門クラブのメンバーである川平氏の戦後沖縄での役割については別の機会に述べるとし、帰国後は琉球放送、放送部長、沖縄放送初代会長、NHK 経営主幹、昭和女子大学教授を務めることになる。台湾時代から児童劇団で舞台に出ることを楽しんでいたゆえ、特別にアナウンサーとしての訓練をしていたわけでもないのに、抵抗なくラジオアナウンサーを務め、戦後の沖縄の放送界を牽引した。また台湾での学校では英語教育、戦後引揚げ直後には、川平氏はアメリカ軍の通訳としても任務を務め、ゆえに難関であった米留学生にも選ばれることになった。台湾生まれの「沖縄人」として、金門クラブの一員として、沖縄戦後史に多いに寄与した。そして、川平氏の脇には常にワンダリーさんの存在があった。

## 2.2 「逆戦争花嫁」ワンダリー川平、沖縄での生活のはじまり

1957年11月2日の新聞に大きく取り上げられたのが沖縄人男性、米国籍女性の結婚であった。アメリカ人向けの新聞にも大きく見出しに“America Girl Marries Okinawa Radio Announcer”と題し、二人の結婚が報じられている。

川平氏30歳、ワンダリーさん28歳のときであった。結婚式は那覇にある聖ペテロ・パウロ エピスコパル教会にて、英語と日本語で行われた。1947年の戦争花嫁法により、米国人と「琉球人」との結婚が認められ米人男性と沖縄の女性の結婚が急増した。しかし、その逆パターン、被占領者側の沖縄の男性と占領者側の米国の女性のカップルは、戦後沖縄において初の婚姻であり、驚きを持って迎えられたことは想像に難くないであろう。男性は前節で紹介した川平朝清氏、女性はアメリカ、カンザス州出身のワンダリー ウィーバー Wanderlee Weaver さんである。沖縄で戦争花嫁第一号が生まれた1947年から10年たってからの出来事である。川平氏によると、その後10年以上沖縄男子とアメリカの女性の結婚はなかったというから、当時二人の結婚がどれほど



(Morning Star でとりあげられた記事。  
川平氏より提供。)

珍しかったかわかるだろう。ワンダラーさんが当時の沖縄社会にとって、どれだけ珍しかったか川平氏が話してくれたエピソードと一緒に勤めるラジオ局にいったときなど、建物の窓中の窓から顔がのぞいたようだ。

沖縄の戦争花嫁が米兵と結婚した理由の一つに、圧倒的な米兵の経済力があつたことは沢峠の調査結果などからも明らかである<sup>34</sup>。ワンダラーさんが被占領地出身の川平さんと結婚した理由を直接聞いてみたかった<sup>35</sup>。さて、川平氏とワンダラーさんの出会いは、米の対沖縄政策の一貫である米国留学制度であつた。当時ラジオアナウンサーであつた川平氏は1953年度の留学生に選ばれ、ミシガン州立大学へ留学した。ガリレオ資金で初めて米国へ降り立った印象について、どれだけアメリカの豊かさが強烈だったがしばしば語られる。「大学の寮でも、学生はフルコースの食事を三食たらふく食べ、毎日風呂に入り、冬は暖房の効いた部屋で本を読み、夜は真っ白いシーツにくるまって寝る生活をしていた。車を持っている学生もかなりいて、どこまでも続く舗装道路をドライブに連れて行ってもらったときなどは、アメリカとは富める国であると思つづく思った」と第一回留学生の比嘉正範は述べている<sup>36</sup>。まだまだ復興半ばの沖縄との生活の差は歴然であつたことがわかる。

川平氏とワンダラーさんとの出会いは大学のスピーチのセミナーであつた。川平氏の話聞く限り、「ひとめぼれ」である。最初に話しかけてきたのはワンダラーさん、そのひとことは、「あなたはタイ人か？」だつたそうである。それからの川平氏は、当時の沖縄の男性のステレオタイプとはかけはなれたスマートさで、ワンダラーさんを魅了していった。別の機会に記せればと思う。川平氏は、わずか一年の付き合いの後には結婚をする決意を固めていたといい、「彼女なら沖縄で一緒にやっていけると思った」と語っている<sup>37</sup>。それは、彼女がクェーカーと同じ、無抵抗平和主義と反享楽主義を唱えるキリスト教メーナイト派の信者であつたことも大きいだろう。川平氏はそもそも、沖縄にテレビを導入するための研究にやってきており、自身に沖縄を離れる選択は微塵もなかつた、と語っている。ワンダラーさんはそうした川平さんの意思の強さと、新しいことを創り出す情熱に惹かれ、信じたのだろう。

スピーチを専攻する大学院生であつたワンダラーさんが、かつてニュース以上の情報を知ることのない沖縄、被占領地出身の男性と恋に落ち、結婚を約束したものの、状況はそれほど簡単ではなかつた。まずはワンダラーさんの家族からの反対である。ただし、確かに反対にあつたものの、川平氏の人柄は、ウィーバー家をすぐに安心させたようである。両親は、結婚を切り出された際、さすがに驚き、川平氏自身にというより、被占領地での沖縄での暮らしは難しいと感じ、少し時間を欲しいと言つたという。ワンダラーさんの2人の兄と弟一人の兄弟は会つて話すと、すぐに、「キヨシ」を好きになつたという。川平家もまた、兄は大反対をしたというが、その反対を遮つたのは母だつた。母は、人種や格差などにこだわらない、とても頼もしい女性だつたようだ。戦前、川平

家の台湾への移住を決断したのも母であった。筆者は、川平氏が、ワンダリーさんとの結婚が可能になったのは母のおかげだ、と話すのを何度も聞いた。ほかにも、アメリカ人の女性がなんで占領地の沖縄の男性と結婚するのかと、米民政府からも、ワンダリーさんにエントリーパミット（入域許可証）をなかなか出してもらえなかった。

二人の結婚については同年4月の『沖縄タイムス』の「季節風」という、地元の最近の注目ニュースの欄に、「最近沖縄駐屯の米軍人と沖縄娘との国際結婚が増える傾向にあるが、これはまた、アメリカン・ガールと沖縄男子が結ばれるという話。／話題の主は現在ミシガン州立大学でアナウンスを専攻している川平清（30）在学中に同大学で勉学中だったワンダ・リー・ウィーヴァー娘（同大学助教授）と知り合い将来を誓い合う仲になったという。（略）」（1957年4月3日付）と取り上げられた。まさに「逆戦争花嫁」を扱った記事である。アメリカ人と沖縄の人々の結婚は法的に認められるようになり、男性アメリカ人で女性沖縄の地元女性との結婚、「戦争花嫁」が増えてきた時期であった。沖縄では驚きをもってとらえられた。しかも男性は、「キヨシ」と親しまれるラジオアナウンサー、地元の人たちの関心を引くニュースであっただろう。

ワンダリーさんは、結婚する、およそ一か月前の10月に沖縄にやってきた。川平氏の話を書く限り、二人が占領者、被占領者といった立場の違いを感じさせるものではなく、国、民族関係なく惹かれ合う男女であった。けれども、生活をするとなれば、話は別であろう。彼女は、結婚を決めてから、沖縄で生活することも承諾した、けれども本当に、“オキナワ”でやっていくことができるのかを、自身で確かめる一か月であった。無理だ、と思ったら、（アメリカに）戻ろうと思っていたという。けれども沖縄の空港で、出迎えていた川平氏より先に、母がワンダリーさんに近づき、ぎゅっと“ハグ”をした。この瞬間だったという、ワンダリーさんは「私はこのお母さんとならやっていける、沖縄でやっていける」と感じたのは。かつて沖縄からアメリカへ降り立った川平氏ら米国留学生たちは、沖縄と米国の生活を「戦災に廃墟に帰した沖縄」と「文明の先端に行くアメリカ」を対比させた<sup>38</sup>。「電話やテレビ、自動販売機、シャワー、水洗便所、初めて見たり使ったりしたもの」にあふれたアメリカは「富める国」であった。ワンダリーさんにとって、まさに逆移動であった。結婚前のおよそ一か月、沖縄での生活水準の格差、違いにさぞ驚きの連続だっただろう。しかし、川平氏の母と、まさに寝食共にするなかで、ワンダリーさんは、沖縄で生活できると確信を持った。

ワンダリーさんは、初めて沖縄に到着した日のことを「ナハの灯りを翼の下に眺める頃になり、これまでの現実味のともなわない感じはようやく消え去り始めました。それでも私はこの現実味のともなわない感じがなくなり、この島が本当に自分の「うち」になるのだろうかと思われていなかった」<sup>39</sup>と語った。それからワンダリーさんは、川平氏が復帰に伴って東京のNHK勤務になるまでのおよそ15年を沖縄で暮らした。沖縄のアメリカ社会に浸かっての生活もできたが、彼女は沖縄の人を夫としたのだから、沖縄の人との生活を大切にしたい、と実践した。一方、米軍基地

内のアメリカンスクールで教鞭をとった。

ワンダリーさんが川平さんと過ごした復帰までの沖縄は、米占領下にありながら、米国、日本との関係に翻弄されつつも、沖縄人としての主体の模索、復帰運動が頂点に上り詰めていく時期であった。米国の理不尽も当然目にしてきたワンダリーさんは何を見、何を感じたのか。ワンダリーさんの沖縄での生活については、現在調査を続けている。

## おわりに

戦後の米の沖縄占領は、予期せぬ結果を生み出した。「戦争花嫁」と呼ばれる女性たち、法制度が現実には追い付かず、慌てて布令を作り出す、といった状況が戦後沖縄の姿であった。占領者である米兵と結婚を決意した非占領者の沖縄の女性たちは、戦後の女性の移動を特徴づけた。彼女たちが、戦後の米支配下、米軍による性犯罪の横行といった恐怖の一方、戦争花嫁が現れた背景には、沖縄の女性たちが移動の機会を得、置かれた社会的地位から脱却する手段でもあった。

他方、占領者に属するアメリカの女性が、被占領側、沖縄の男性と結婚する、「逆戦争花嫁」が現れた。ワンダリー・ウィーバーさんであった。戦後沖縄の女性の移動を考えるにあたり、ワンダリーさんの存在は極めて重要と考える。沖縄の戦後史にとっても、これまでとりあげられてこなかった側面を照らし出すことになるだろう。ワンダリーの存在は、当時沖縄の人たちにとっては関心の的であった、にもかかわらず、戦後史、移民史においてワンダリーさんの存在は管見の限りみあたらない。彼女の存在の重要さに気づかせてくれたのが比屋根美代子氏であった。

ワンダリーさんに関する多くの記述は、夫である川平朝清氏とのインタビューや、いただいた資料、当時の新聞資料である。とりわけ、2019年12月より始めた川平朝清とのインタビューは貴重であり、引き続きおこないたい。

今後の課題としては、ワンダリーさんが沖縄でどのように生活していたか、アメリカと沖縄両コミュニティに身を置き、当時の沖縄問題をどのようにとらえていたのだろうか。また、ワンダリーさんは教育を通して、等身大の日常の沖縄を基地内のアメリカ人に教育を通して伝えようとした。その実践がソーシャル・スタディーズという科目であり、そのために作成された Okinawa Studies という教科書を紐解いていきたい。ほか、米民政府の対日文化政策においてワンダリーさんにどのような役割を期待したかなども関心のあるところである。

---

<sup>1</sup> 一般的に、戦後日本に駐留した米軍兵士や軍属と結婚した日本人女性は「戦争花嫁」とよばれた(島田法子編『写真花嫁・戦争花嫁の辿った道—女性移民史の発掘』明石書店、2009年、150頁)。「戦争花嫁」の解釈については多様な言説が構築され、沖縄の「戦争花嫁」についても然りである。沖縄の「戦争花嫁」の期間は、米の沖縄の占領が終わる1972年までであり、日本本土とは異なる。沢峠悦子は、沖縄では、米軍人と沖縄の女性との結

- 婚を「国際結婚」と呼ぶ（沢舩悦子『オキナワ海を渡った米兵花嫁たち』高文研、2000年、9頁）。
- 2 本報告は、2019年11月7日から10日、4日間に渡ってハワイで開かれたASA-JAASの合同パネル（“Build As We Fight” 於ハワイコンベンションセンター）での報告（Relationship between ‘Okinawan war brides’ and Okinawan community during U.S occupation against Okinawa (1945-1972) from gender perspectives: Another history of Okinawan immigration）をさらに深めるものである。
  - 3 島田法子編『写真花嫁・戦争花嫁の辿った道—女性移民の発掘』（明石書店、2009年）、安富成良・スタウト梅津和子『アメリカに渡った戦争花嫁 日本国際結婚パイオニアの記録』（明石書店、2005年）など、他にも数多くみられる。
  - 4 『沖縄タイムス』2018年8月3日朝刊。
  - 5 山下靖子津田塾大学後期博士課程終了論文（2006年提出）『ハワイの「沖縄系移民」と沖縄帰属問題・返還問題』参照。
  - 6 沢舩、前掲書、17頁。
  - 7 比屋根美代子『第二次大戦を境界とする「ふたつの花嫁」』（2016年9月16日草稿）未出版原稿より。比屋根は満州への沖縄移民の研究を『沖縄と「満州」「満州一般開拓団」の記録』（明石書店、2013年）にまとめた。
  - 8 本来は“Wander Lee Weaver”とつづるのだが、本人はWanderleeと綴ることを好み、このように表記していたという（川平朝清氏より）。
  - 9 同上、322頁から323頁。
  - 10 外間米子「屈辱と栄光からの出発」宮里悦編、前掲書。
  - 11 『私の戦後史』沖縄タイムス、1980年、25頁。
  - 12 外間、前掲書、43頁から44頁。
  - 13 安富成良「戦争花嫁」と日系コミュニティ（Ⅲ）：ステレオタイプに基づく排斥から受容へ」嘉悦大学リポジトリ55頁から82頁 <https://core.ac.uk/download/pdf/235258807.pdf>（アクセス日 2020年5月2日）。
  - 14 比屋根美代子、前掲未発表稿より。
  - 15 沢舩、前掲書、175頁から176頁。
  - 16 同上。178頁。
  - 17 嘉本伊都子「婦米二世との『国際結婚』—飯沼信子さんのライフ・ヒストリーを通して」『京都女子大学現代社会研究』23（京都女子大学リポジトリ、2020年10月2日アクセス）、24頁。米の家族法は州の法律によるため、異人種間婚姻禁止法が制定されていた州出身の白人と規定される兵士と日本人女性との婚姻は認められなかった可能性がある、と、嘉本は指摘する（同論文、27頁）。
  - 18 嘉本、前掲書、25頁。
  - 19 同上。
  - 20 『うるま新報』1947年9月5日。
  - 21 刊沖縄、388頁。
  - 22 沢舩、前掲書、287頁、他、安富成良・スタウト梅津和子『アメリカに渡った戦争花嫁 日本国際結婚パイオニアの記録』（明石書店、2005年）参照。
  - 23 沢舩による調査結果によるインタビュー調査より（沢舩、前掲書、121頁）。
  - 24 比屋根美代子氏とのやりとりから（2021年3月6日）。
  - 25 同ラジオ局は、琉球列島米軍政府（MG）民間情報教育部（CIE）に属しており、スタジオ機器類はアメリカの最新鋭のマイクやテープレコーダーなどが入っており、NHKの機器に比べ一段とすぐれていた（川平朝清「ラジオからテレビへの道～わがガリオア留学記～」ガリオア・フルブライト沖縄同窓会、前掲書、110頁）。
  - 26 邱昱翔（大阪市立大学・院生）「川平朝申の台湾時期研究—「銀の光子倶楽園」の活動を中心に」（日本台湾学会第21回学術大会報告より。2019年6月7日及8日）。
  - 27 2017年10月28日、台湾文化センターにて講演原稿（川平氏より提供）。タイトル「我が登竜門—旧7年制台北高等学校」
  - 28 ジョージ・H・カー（蕭成美訳、川平朝清監修）『裏切られた台湾』同時代社、2006年。
  - 29 『裏切られた台湾』の日本語翻訳の監修も手掛けた。

- 30 川平、台湾文化センターでの講演より（前掲）。
- 31 同上。
- 32 台湾から沖縄への引揚げの様子について次のように記している。「台湾から沖縄へは、携行荷物は制限され、まずは避難民しながら破壊された総督府の集中営での生活を経て、基隆湊から上陸用舟艇 LST に乗せられ、敗戦国民の悲哀を感じました。ここで支配者から被支配者への転落、台湾人同級生の経験に思いを馳せることになりました」（同上）。
- 33 同上、111 頁。川平氏へのインタビュー参照（2019 年 12 月～2 月）。
- 34 沢岷、前掲書、28 頁。
- 35 ワンダリーさんは執筆者が川平氏への聞き取りを始める数年前に亡くなられていた。
- 36 比嘉正範「米国留学の喜怒哀楽」ガリオア・フルブライト沖縄同窓会『エッセイズ ゴールデンゲイト』ひるぎ社、1987 年、20 頁。
- 37 『沖縄タイムス』「交差点」（1964 年 1 月 1 日）。
- 38 比嘉幹雄、ガリオア・フルブライト沖縄同窓会『エッセイズ ゴールデンゲイト』ひるぎ社、1987 年、28 頁。
- 39 『今日の琉球』第 2 巻 3 号（1958 年）。

## 第一次資料

『うるま新報』

比屋根美代子「第二次大戦を境界とする『ふたつの花嫁』」2016（未公開）

『沖縄タイムス』（1945 年から 1972 年 5 月）

『琉球新報』（1945 年から 1972 年 5 月）

2017 年 10 月 28 日、台湾文化センターにて講演原稿（川平氏より提供）。タイトル「我が登竜門一旧 7 年制台北高等学校」

※ワンダリーさんについては 2019 年 12 月から 1 月にかけて川平朝清氏にインタビュー（2021 年 12 月から 2020 年 2 月にかけて。その後はメール等でのやりとりをおこなう）、資料の提供を受けている。注がないかぎり、川平氏によるインタビューからである。

## 参考文献

植木武『戦争花嫁』五十年を語る～草の根の親善大使～』勉誠出版、2002 年。

沖縄タイムス社編『沖縄の証言（上巻）』沖縄タイムス社、1971 年。

沖縄婦人運動史研究会（宮里悦編）『沖縄・女たちの戦後一焼土からの出発一』ひるぎ社、1986 年。

川平朝清『我が家の子育て記録 犬はだれだ、ほくはごみだ』岩崎書店、2007 年。

月刊沖縄社『アメリカの沖縄統治関係法規総覧』池宮商会、1983 年。

佐藤佑香「日米の移民政策における「写真花嫁」の位置づけ」『東西南北』2015 年。

（和光大学リポジトリ <http://id.nii.ac.jp/1073/00003838/> アクセス日 1/2/2020）

島田法子編『写真花嫁・戦争花嫁の辿った道—女性移民史の発掘』明石書店、2009 年。

沢岷悦子『オキナワ・海を渡った米兵花嫁たち』高文研、2000 年。

財団法人沖縄県文化振興会「琉球列島の軍政 1945-1950」『沖縄県史 資料編 14.』沖縄県教育委員会、2002 年。

安富成良「戦争花嫁」と日系コミュニティ（Ⅲ）：ステレオタイプに基づく排斥から受容へ」嘉悦大学リポジトリ、55 頁から 82 頁。（<https://core.ac.uk/download/pdf/235258807.pdf> アクセス日 2020 年 5 月 2 日）

安富成良・スタウト梅津和子『アメリカに渡った戦争花嫁 日本国際結婚パイオニアの記録』明石書店、2005 年。

安富成良「日本人花嫁法（1947 年）と日系社会」『嘉悦大学研究論集』46-1、2003 年。

（嘉悦大学学術リポジトリ <http://id.nii.ac.jp/1269/00000083/> アクセス日 2020 年 11 月 2 日）

嘉本伊都子「帰米二世との『国際結婚』—飯沼信子さんのライフ・ヒストリーを通して」『京都女子大学現代社会研究』23。